

論 説

マルクス「学位論文」の哲学と思想

角 田 修 一

はじめに—課題設定

1. エピクロスの哲学とヘーゲル「哲学史」
2. マルクス「学位論文」におけるエピクロスの原子論
3. エピクロス哲学の原理—自己意識の絶対性と自由
4. 自己意識哲学と自由主義思想—諸説の検討
5. 観念論と唯物論—むすびにかえて

はじめに—課題設定

K・マルクスの学位論文「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異」（イェナ大学、1841年4月、以下「学位論文」）は、かれが弱冠22歳で書いた最初の学術的著作である。いわゆる初期マルクスをめぐる議論のなかでもとりあげられることが多くはないが、いくつか素朴な、あるいは素直な疑問がわく論文である。

ヘーゲルの弟子であるガンズ（Eduard Gans, 1797-1839, 法哲学）などをとおしてヘーゲルの観念論哲学を学んだマルクスが、なぜ学位論文で古代ギリシャの唯物論を代表する哲学者をとりあげたのか。なかでも、ヘーゲル『哲学史講義』（マルクスは準備ノートでミシュレ K. L. Michelet 編第1版第2巻1833年刊を用いている）をみると、エピクロスにたいするヘーゲルの評価はかばしくない。にもかかわらずマルクスは学位論文の結論部分で、デモクリトスよりもエピクロスを「ギリシャ最大の啓蒙家」とよび、エピクロスの哲学は「自己意識の自然学」で、その原理は「自己意識の絶対性と自由」だと評価した。

これらのことから、マルクスは論文執筆時すでにヘーゲル哲学にたいしても批判的だったのではないか、マルクスが関係していたいわゆるヘーゲル左派（マルクスの学位論文の注における表現は「自由派」）の「自己意識の哲学」（ブルーノ・バウアー）との関係で、学位論文執筆当時、マルクスはバウアーらと同じ理論的立場にいたのか、それともバウアーらにたいしてすでに一定の批判をもっていたのか（周知のように、このあとマルクスはバウアーらの立場を厳しく批判するようになる）、あるいはそもそもこの論文のオリジナリティは何か、といった問題が提起されている。さらに、学位論文執筆当時のマルクスの哲学上の立場は観念論だったのかどうか、そのマルクスが論文の後にフォイエルバッハの唯物論を受容するが、その要素はすでにこの学位論文のなかにあるのか、

また、その後にはフォイエルバッハを批判することになる要素もすでに学位論文のなかにあるのかなどの問題もうかびあがるところである。

マルクスの学位論文は生前に公刊されなかった。1902年にF・メーリングによってはじめて公表されたのだが、レーニンが論文「カール・マルクス」（1914年）において「(学位論文) 当時のマルクスは、その見解からすれば、まだヘーゲル学派の観念論者であった」という評価を下した。そのため、マルクスの1841年から1844年ないし45年にいたる急速な理論的成長は「観念論から唯物論への転換」として、またそれとともに「革命的民主主義から共産主義へ」として特徴づけられることが多かった。

わが国のマルクス研究においても、『経済学・哲学草稿』（1844年）あるいは「ヘーゲル国法論批判」（1843年）に比べて、学位論文はとりあげられる機会が少なかった。1927年に出されたリャザノフ編の旧全集版にもとづく改造社版『マルクス・エンゲルス全集』第1巻（1928年）には服部英太郎による邦訳がおさめられている。それ以来、1970年代までに、淡野安太郎、重田晃一、良知力、富沢賢治、城塚登、山中隆次、廣松渉、正木八郎、大井正、疋野景子などが初期マルクス研究のなかで学位論文を扱っている。また、これらの研究のなかで、リャザノフ、メーリング、ルカーチ、コルニュ、オイゼルマン、レーヴィット、マクレラン、ヒルマン、ローゼンなどの海外における学位論文研究が紹介された。1980年代以降は、「マルクスの哲学」とは何だったのかという問題の一環として学位論文が取りあげられる機会が多くなっている（鷲田小彌太、山本広太郎、岩淵慶一、渡辺憲正、石井伸男、田畑稔など）。さらに、マルクスの自然認識あるいはエコロジー論について論じられる際にこの学位論文に言及されることもある（工藤秀明、フォスター）。(以上については参考文献リストをみられたい)。

マルクス学位論文の研究は、ヘーゲル哲学、ヘーゲル左派なかでもブルーノ・バウアーの哲学と思想との関係、そしていわゆる三月革命前期とドイツ初期社会主義というように問題が広がる。しかし、本稿では、最初の素朴な疑問にたいする一定の解答をみいだすために、学位論文とその執筆時期に限定し、エピクロス哲学の評価、ヘーゲル哲学およびブルーノ・バウアーの「自己意識の哲学」との関係に問題を絞ることにしたい。学位論文執筆期のマルクスにその後の理論的成長につながるすべてを求めることはできないが、「マルクス」になっていく萌芽を哲学と思想の出発点においてみいだすことは、同時にその限界を明らかにすることにつながると思う。

以下、1. でエピクロスの哲学をヘーゲルの『哲学史講義』における評価と重ねあわせてみる。2. と3. では学位論文におけるエピクロス評価をとりあげる。そのうえで4. では「自己意識の哲学」と自由主義思想をめぐる、「むすび」では「観念論と唯物論」をめぐる諸説を検討する。

1. エピクロスの哲学とヘーゲル「哲学史」

エピクロス (Epikouros, 紀元前341～同270) は、古代ギリシャ哲学の解体期、都市国家ポリスの衰退期にあたるヘレニズム時代の哲学者である。エピクロスは膨大な量の著作を書いたとされるが、残されたものは数少ない。したがって、ヘーゲルの『哲学史講義』でも同様であるが、マルクスの学位論文(準備ノート)では、エピクロスが書いたとされる断片的な著作や、他の人びと

が書いたエピクロス哲学の紹介をもとに研究がなされている¹⁾。

エピクロスは反対者からいわれなき中傷や非難を浴びたとされているが、ヘーゲルは『哲学史講義』のなかで、「私たちはエピクロス主義について通常世に行われているすべての俗見を脱却しなければならぬ²⁾」と述べた。以下、ごく簡単に、エピクロス哲学の要点をヘーゲル『哲学史講義』における評価と重ね合わせてみる。

エピクロス哲学は、一般的にいえば、原子論的唯物論を基礎とする実践哲学である。その哲学は規準論 (Kanonik) ・自然学 (Physik) ・倫理学 (道徳論 Moral) の3部門からなる。かれは、真偽や善悪の規準を感覚や感情の明瞭性 (エネルゲイア energeia, 英 actuality) におき、神々や死後に関する迷信 (臆見ドクサ doxa) や恐怖から脱して、平静な心境 (アタクシア ataraxia) と肉体の苦しみのない状態を保って朗らかに生きることを目的とする哲学を説いた。

まず、エピクロス哲学にいう「規準論」とは、認識において真理を成り立たせる規則を構成する諸契機を扱う、いわばエピクロス哲学の論理学である。

エピクロスによれば、「すべては感覚にしたがってみるべきである」(岩文11ページ)。この感覚に由来して形成される「先取観念」によって、ものごとの判断の真偽が決定される。行為に関しては、「現存する感情にしたがって」、「快=善」と「苦=悪」とを区別すべきであると言う。

こうしたエピクロスの「規準論」について、ヘーゲルは、「きわめて単純で、抽象的で浅薄」(前掲書227ページ)なものだと批判している。

つぎの「自然学」によれば、感覚や直観は、その外にある事物の表面から流出する「映像」に対応する性質が感覚をとおしてわれわれの内側に形成されるものである。この意味で、観念は実在を反映する³⁾。問題は事物の本質である。エピクロスによれば、全宇宙は「有るもの」(物質)から生じるので、「有らぬもの」へと消滅することはない。その根本原理は「不可分な物的実在である原子」である。原子それ自体は、形状、重さ、大きさ以外の性質を持たない。そして原子はたえず、永遠に運動する。その運動する場が「空虚と空間とかの不可触的な実在とかよばれるもの」である。この意味で、全宇宙は無限である。物体は運動するものであって、物体と空虚の他に実在するものはない。アイデアや神、理性のような「それ自体として完全な実在として捉えられるもの」は存在しない。ただし、神は不死と智福の存在であり、人びとの共通の明瞭な直覚にもとづいて認識される。したがって、「エピクロスは無神論者ではない」(岩文、出・岩崎の訳注、174ページより)ことに注意する必要がある。

以上のようなエピクロスの形而上学と自然学について、ヘーゲルは当然ながらきわめて否定的である。ヘーゲルによれば、本質的な存在である原子と感性的な現象との関係を示すことが肝要である。ところが、エピクロスは、「何の意味もないあいまいなことを、とりとめもなく、あれこれ述べているだけである」。原子相互のある種の関係である性質や、原子の衝突と結合による有機的な事物も、エピクロスにおいてはすべて偶然的な運動によって作りだされたものにすぎない。ヘーゲルによれば、「エピクロスは思考がそれ自体として存在することを認めない。かれの原子それ自体が思考の本性 (にしたがったもの)、すなわち直接的に存在するのではなく、本質的に媒介によるものであり、したがって否定的あるいは普遍的な存在であることに考え及ばなかった。これこそ、エピクロスの第1の、そしてまた唯一の不整合である」(前掲書236ページ)⁴⁾。

さらに、エピクロスの自然学は経験的な科学の方法である。迷信や神への恐れを一掃し、「啓

蒙をおしすすめた」。しかし、有限なものに立ちどまっているので、「エピクロスの哲学的な思考について、私たちは何の敬意もちえない。あるいはそれはむしろ、まったくの無思想である」（同上、247ページ）とヘーゲルは言う。

ヘーゲルはまた、エピクロスと同時期のギリシャ哲学であるストア派（stoicism）とエピクロスとを比較し、エピクロス哲学の一面性をつぎのように批判する。

ストア派は、普遍的なものとしての思考の原理すなわち抽象的な思考されたものとしての理性（ロゴス）や概念を真理と考えて、これに固執する。こうしたストア派の「抽象的普遍」にたいしてエピクロスの哲学は、存在を感覚においてとらえ、個別的な形式における意識を本質あるいは原理ととらえる。ヘーゲルによれば、ストア派とエピクロス派のどちらも一面的であって、特定の原理や規準だけを立てる哲学すなわち独断論（Dogmatismus）である。どちらも、一方に原理や規準があるとすれば、他方で、主観はこの原理によって精神の自由、自立を獲得すべきだとする。したがって、何ものにも動じず、すべてのものに無関心であるような哲学、これがストア派にもエピクロスにも共通する考え方である。

たしかに、エピクロスの道徳論（実践哲学）は乱されることがない純粋な自己意識におかれた。エピクロスは言う。「身体の健康と心境の平静こそが祝福ある生の目的である。（中略）快は、この生の初めと終わりである。われわれは快を生まれながらの善と認める」。「すべての始原、しかも最大の善は思慮深さである」。（以上、岩文69～72ページ）。

ヘーゲルによれば、エピクロスの道徳論はかれの教えのなかでもっとも評判が悪いが、かれの教えのなかではむしろもっとも良い。なぜなら、エピクロスは、快を享受するうえで哲学にもとづく思慮深さを求めているからである。エピクロスにあっては、快という目的に対応する普遍的な思考と、感覚という個別的なものが合致するようになっている。

もう1つ。エピクロスは「重さ」を原子の根本的な性質ととらえ、原子の運動については重さによる落下運動を考えた。その運動はデモクリトスのような直線ではなく、直線からいくらかはそれる線すなわち曲線をなす運動だとされる。そうなる運動は無差別な方向になるので、その結果、原子がぶつかりあい、本質的ではない事物の統一が形成される。

「原子はたえず、永遠に運動する。或るものは〈垂直に落下し、或るものは方向が偏り、或るものは衝突して跳ね返る。……〉」（エピクロス、岩文14ページ⁵⁾）。この「方向の偏り」については、ヘーゲルは「思いつきの作りごと」「空虚」あるいは「貧弱なもの」だと酷評している。

以上、ごく簡単に、エピクロスの哲学とこれにたいするヘーゲルの評価をみた。エピクロスおよびその前身にあたるデモクリトスの哲学は原子論にもとづく唯物論であった。これにたいして、ヘーゲルは、「有限なものを真の存在とは認めない」絶対的観念論の立場から、思考をも原子から説明するエピクロスの哲学は「浅薄」だとし、思考と存在、普遍と個別、本質と現象のあいだ⁶⁾のかい離あるいは不整合を批判したのである。

では、マルクスは学位論文においてなぜデモクリトスとエピクロスの差異をとりあげ、なかでもエピクロスの哲学を高く評価したのか。そこにはヘーゲルのエピクロス評価とは異なって、むしろヘーゲルをのりこえ、その後のマルクスの哲学と思想の展開の芽となる要素があるのではないか。つぎにそのことを明らかにしよう。

2. マルクス「学位論文」におけるエピクロスの原子論

エピクロスより前のギリシャ哲学成熟期（アテネ時代）に、プラトンの観念論哲学と対立したデモクリトス（前460頃～370頃）の唯物論哲学があった。このデモクリトスの哲学を継承し、発展させたのがエピクロスであるとされる。こうした通説と異なり、デモクリトスと比べてむしろエピクロスの哲学の方を高く評価し、その意義と同時に限界、そしてまたその限界をのりこえる方向をも明らかにすることがマルクス学位論文の主題であった。⁷⁾

マルクスは学位論文の「序言」（1841年3月）でこの論文の意図を説明した。そのなかで、「ギリシャ哲学史のなかで今日までのところまだ解決されていない問題を解決したと信じる」と書いている。そして、この論文は「エピクロス派、ストア派、および懐疑派の哲学の一団を全ギリシャの思弁との関連で詳細に叙述するつもりである大きな著作のたんなる先ぶれをなすものとみなしてほしい」とも予告した（この著作はもちろん書かれなかった）。そして、ヘーゲル『哲学史講義』におけるこれら3つの哲学体系の扱いに触れて、つぎのように述べている。

これら3つの哲学体系の「普遍的なものをヘーゲルは全体的には正しく規定しているが、（中略）すぐれて思弁的と呼んだものについてのヘーゲルの見解が妨げとなって、ギリシャ哲学の歴史とギリシャ精神一般にたいしてこれらの体系がもつ高い意義を認識できなかった。これらの体系は真のギリシャ哲学史を理解する鍵である。」（MEW, Bd. 40, S. 261-2）

このように、哲学史講義におけるヘーゲルの評価と異なり、マルクスはヘーゲルが独断論と呼んだエピクロスとストア主義、そして懐疑派の哲学を高く評価する。しかもヘーゲルとの違いはヘーゲル哲学の思弁性によるものであると明言しているのである。

この序言において、マルクスは、哲学は「世界を征服しようとする自由な心」であるとす。そして、「人間の自己意識を最高の神性と認めないすべての神々にたいする哲学自身の宣言」と言い、「自己意識と並ぶものはだれもない」と宣言する。これは、同論文の結論部分においてエピクロスの哲学の原理を「自己意識の絶対性と自由」と評価することに対応し、みずからの哲学上の立場を自己意識としたものであるといえる。

学位論文と詳細な注を執筆する前、1839年にマルクスは7冊の準備ノートを作成している。以下、「学位論文」本文、注および準備ノートにもとづいて、マルクスによるエピクロス評価を明らかにしよう。⁸⁾

学位論文第1部はデモクリトスとエピクロスの自然哲学の「一般的差異」を論じる。先にみたように、エピクロスの自然学は「原子と空虚」を根本原理とすることにおいて、デモクリトスの自然学と同じである。ところが、原子と感覚的世界との関係になると、両者は正反対の立場になる。デモクリトスが感覚的世界を主観的仮象とするのにたいして、エピクロスは感覚的世界を客観的現象とする。したがって、エピクロスでは、客観的現象に対応する感覚的知覚が真理の規準になる。これにたいして、デモクリトスでは、原理は現象に表れず、現存在を欠く。その代わりに、原理とは別に存在する実在世界については哲学とは別の経験的観察と実証的知識に委ねられる。実在世界についてデモクリトスはたいへん博学であった。これと比べて、エピクロスは、無

学ではないが、哲学に満足しているという意味で幸福である。

さらに、デモクリトスはすべてを原子の運動による必然性ととらえる決定論の立場である。これにたいし、エピクロスは偶然を認める。偶然を認めることはあらゆる可能性（「抽象的可能性」）を認めることである。以上の2つがマルクスがとらえた両者の「一般的差異」である。

学位論文第2部では両者の「個別的差異」が考察される

デモクリトスは空虚のなかの原子の運動を直線的な落下運動と多くの原子の反発とするが、エピクロスはこの2つに「直線からの偏り」を加える。これが両者における最初の個別的差異である。マルクスは、この「原子の直線からの偏りが全エピクロス哲学をつらぬいている」（Ibid., S. 282）ことを見抜いた（先に述べたように、ヘーゲルはこの考えを酷評した）。

原子の運動が直線であるかぎり、原子の純粋な個別性あるいは自立した物体性は否定され、たんなる点になってしまう。したがって、原子は他者との関係に規定された存在（「定有」）でしかない。そこで純粋な自立的な個別性（「一者」）と他者との関係性とは対立する。マルクスはここに、「原子の概念のなかに存在する矛盾」（Ibid., S. 285）を見いだすのである。そして、原子の偏りはこの矛盾の現実化であるにとらえる。というのは、原子の偏りがあるから「はねかえり」や「ぶつかり」が生じ、世界がつくられるからである。

さらにマルクスは、原子論を人間の本質的なあり方にせまるものと理解する。すなわち、原子を「ひとりの個別的な人間」の自立性にとらえ、そこには「直接に存在する個別性」としての人間があるとみるのである。

「人間が自然の所産であることをやめるのは、かれが関係する他者がなんら異なる現存在ではなく、たとえまだ精神ではないにしても、それ自身がひとりの個別の人間であるときである。」（Ibid., S. 284）

この一文の「たとえまだ精神ではないにしても」というくだりは、ヘーゲル『精神現象学』を想起させる。というのは、ヘーゲルにおける「精神」はまず、感性的な対象がそれ自体としてあって、「意識」は個別的な「このもの」とであると確信するところからはじまる。そのつぎに、自分自身を対象とする「自己意識（自覚）」へとすすみ、こののちに「理性」を経て「精神」にいたる。したがって、人間の意識は他者を個別的な存在として自覚する段階から、さらに自分自身を対象とする「自己意識」としての人間にすまなければならない。マルクスは明らかにヘーゲル『精神現象学』の展開を意識して、つぎのように続けている。

「しかし、人間が人間としてその唯一の現実的客体となるには、かれはその相対的な存在を、欲求の力とたんなる自然の力とを、自分のうちで破壊してしまわなければならない。」（Ibid.,）

マルクスがこのなかで「相対的な存在」というのは、「自己意識」としての人間はまず自然とくに生命を自分の対象とし、これを自分のものにするによって存在するものであり、その意味で相対的だということである。そして、こうした相対的な存在をのりこえなければならない⁹⁾というのは、そこには矛盾があるということである。

このようにして、エピクロスのいう「反発は自己意識の最初の形態」としてとらえられる。「それは、自分を直接的に存在するもの、抽象的に個別的なものとしてとらえるところの自己意識に照応している。／したがって、原子の概念は反発において現実化しているのである。（中略）原子の反発においては、直線による落下における原子の質料性（Materialität）と、偏りにおいて

措定されていた形態規定 (Formbestimmung) とが総合的に結合されている」(Ibid.)。マルクスは原子の反発を素材的側面と観念的形態規定性の側面の両面からとらえ、デモクリトスは素材面しかとらえないのにたいして、エピクロスは観念的な面したがって形態規定性の面からこれをとらえた¹⁰⁾とみる。

以上にみたように、マルクスは、エピクロスの原子が「抽象的個別的なもの」であることを指摘しながら、エピクロスの原子の偏り（という運動）において、感覚的な姿であっても、原子の概念とそのなかにある矛盾および反発の本質がとらえられたと評価する。マルクスによれば、エピクロスにおいては「反発をより具体的な形態に適用し、政治的な領域では契約、社会的な領域では友愛であり、友愛が最高のものとして称えられている」(Ibid., S. 285)¹¹⁾のである。

3. エピクロス哲学の原理—自己意識の絶対性と自由

学位論文第2部は、第1部に続く4つの章において、デモクリトスとエピクロスの自然学の差異を扱い、エピクロス哲学の原理を総括する。

マルクスはまず、エピクロスの原子は変化しないものだから、可変的な属性をもつということはその「原子の概念と矛盾する」と指摘する。エピクロスにおいては、反発する多数の原子は感性的空間をとおして分かれているので、必然的に直接にお互いに異なるし、その純粋な本質とも異なっていなければならない。これは質 (Qualitäten) すなわち規定性あるいは規定された存在 (「定有」) のことである。エピクロスの原子論では、大きさ、形状、重さがそれにあたる。

マルクスによれば、「原子は質によってその概念と矛盾するところの、ある現存在を獲得する。それは外化され、その本質から区別された定有として措定される。この矛盾こそがエピクロスの主要な関心をなしている」(Ibid., S. 286)。エピクロスは原子の質料的本性と同時に、それを否定するような諸属性をも措定するというのである。

このことは、2. で紹介した質料と形態規定との関係、直線運動と偏りとの関係につうじる。エピクロスにおいてはこれらの関係がかい離し、不整合を起こしているとヘーゲルは批判したが、マルクスはこれらの関係のなかに、質料と形態、概念と現存在のあいだの矛盾をみいだした。マルクスはつぎのように述べる。

「原子の諸属性の考察は、したがって、偏りの考察と同じ結論をわれわれに与える。すなわち、エピクロスは原子の概念における本質と現存在とのあいだの矛盾を客観化し、そうして原子論の学を提供したのである。デモクリトスの場合は、原理それ自体の現実化もおこらず、たんに質料的な面だけが固執され、経験的知識のための仮説がもちだされるにすぎない。」(Ibid., S. 289f)

つまり、マルクスによれば、デモクリトスの唯物論は事物の質料だけに着目する質料主義 (materialism) である。エピクロスはその限界を脱して、事物の形態規定の側面をもとらえた。しかもそれを原子という原理のあり様として展開した。ただし、「エピクロスのやり方」は、「1つの概念の異なる諸規定を異なる自立的な現存在として措定しがちである。その原理が原子であるように、かれの知のあり方それ自体が原子論的である。展開のそれぞれの契機が、かれの手に

かかるおとすぐに、1つの固定した、その連関から、いわば空虚な空間によって分離された現実性に転化する。すなわち、すべての規定が孤立した個別性の形態をとる」（Ibid., S. 292）。たとえば「無限性」がその例である。だから、「異なる諸規定に異なる現存在の形態を与えることによって、そうした区別を概念把握したわけではない」。エピクロスにおいては、現存在が原理あるいは概念からの展開として把握されていない。この意味で、「原子は諸属性によってその概念から疎外されている。しかし、それと同時に、原子はその構成において完成されている。質を与えられた原子の反発と、それと連関する集合体から、いまや現象世界が生じる」（ibid., S. 293）のである。

エピクロスにおける原子は「自然の絶対的な本質的な形態」であるが、「この絶対的な形態が、いまや絶対的な質料（Materie）にまで、現象世界の無形式な基体（Substrat）にまで降格されている」（Ibid.）。マルクスはここに、エピクロスにおける原子の概念の矛盾をみいだす。

つぎに時間について。デモクリトスの体系においては、時間はどのような意味も、どのような必然性ももたない。これにたいし、エピクロスにおいては、時間は本質の世界から除外され、現象の絶対的な形態となる。すなわち、時間は感覚器官によってとらえられる物体あるいは実体の偶有性である。それは自然の客観的現象あるいは実体の変化である。したがって、現象世界をとらえる感性と、物体から生じる「映像」および時間は1つの物（Ding）である。

こうした考察からの帰結として、マルクスは言う。「第1に、エピクロスは質料と形態とのあいだの矛盾を現象的自然の性格とし、そこでこの現象的自然は本質的な、原子の対応像になる。（中略）第2に、エピクロスのもとではじめて、現象は本質の疎外としてとらえられる。（中略）最後に、エピクロスによれば……正当にも、現象的自然は客観的なものとして措定され、感覚的知覚は具体的自然の真の標識とされる。もっとも、その基礎である原子は理性によってのみ感得される。」（Ibid., S. 236）

このように、エピクロスにおいて、人間の自己意識は、「抽象的理性」としては原子という「抽象的で個別的な自然形式」であるが、感性としては「経験的な個別的な自己意識」として「具体的自然の唯一の標識」（ibid., S. 297）となる。これがエピクロスにおける「自己意識の自然学」（ibid., S. 305）である。

エピクロスの哲学における矛盾は、天体と気象に関連する過程（メテオーレ）において現れ、それとともに解消される。エピクロスは天界・気象界の事象についてはいくつもの説明が可能であると主張し、神学的な、あるいは迷信による説明に反対する。しかし、それは、天体や気象のなかに個別的な自己意識の平静さを破るような自然の「絶対的な自立性」（Ibid., S. 281）や永遠性あるいは不変性をみいだすからである。マルクスは、「エピクロスは機械的な自然以外の自然を知らない」と指摘し、天体が「抽象的、個別的な自己意識」に敵対する「具体的」で「普遍的なもの（das Allgemeine）」あるいは「現存する普遍性」としてとらえられていることを指摘する。したがって、エピクロスの「自己意識の自然学」の帰結は「普遍的なものにたいする意識的な対立」（Ibid., S. 305）になるのである。

エピクロス哲学の原理は、個別的な形式においてとらえられているとはいえ、「自己意識の絶対性と自由」（Ibid., S. 304）である。この「抽象的に個別的な自己意識」を絶対的な原理とする哲学は、具体的な「普遍的なもの」にたいして「意識的に対立」するから、エピクロスは宗教や天空が人間生活を圧迫することに立ち向かった「ギリシャ最大の啓蒙家」である。これに比べて、

ストア派の自己意識は「抽象的に普遍的な自己意識」であるから、迷信と神秘主義に道を開くことになる。また、デモクリトスの原子は純粋な抽象的なカテゴリーにとどまる1つの仮説にすぎない。これが学位論文におけるマルクスの結論であった。¹²⁾

4. 自己意識哲学と自由主義思想—諸説の検討

マルクスは、2、3で検討したように、エピクロスの原子論哲学を「抽象的で個別的な自己意識」による世界の把握だととらえた。ここで「抽象的」にたいして「具体的」を、「個別的」にたいして「普遍的」を対置すれば、エピクロスの「抽象的で個別的な自己意識」にたいする「抽象的で普遍的な自己意識」はストア派の哲学の立場であり、「具体的で普遍的な自己意識」はヘーゲルの哲学の立場になる。では、マルクスの立場はといえば、具体的で「経験的な個別的な自己意識」(MEW, Bd. 40, S. 297)としての人間である。(このことがより明確になるのはもう少し後のことである。『聖家族』1845年「序」の「現実的人間主義」)。

学位論文の序言においてマルクスが明言したのは「自己意識」を最高とする哲学の立場に立つことであった。そして、学位論文の内容でもっとも重要なことは、マルクスがエピクロスの原子論の「抽象的個別的自己意識」と「具体的で普遍的なもの」(これを自己意識とは言っていないことに注意)との矛盾を把握したことである。¹³⁾この矛盾把握の基礎にはヘーゲルの弁証法と哲学的「自己意識」がある。そこで、学位論文をめぐる諸説の検討にあたっては、まず哲学的「自己意識」を検討しなければならない。

そもそも、エピクロス派とストア派の哲学を独断論とし、これに懐疑派(スケプシス主義)を加えて、これら三学派の哲学原理が自己意識にあるとしたのはヘーゲル『哲学史講義』であった。ヘーゲルによれば、これら三派の哲学は、特殊なものを包摂し、特殊なものに適用される「普遍的なもの」という理念(Idee)の意識をまだもっていないので、「理性」より前の段階の「悟性(知性)の哲学」である。しかし、これらの哲学には体系化への要求がある。そのため、真理の標識(規準)となるような「1つの原理にもとづいて、あらゆる特殊なものを認識することを求める」。「これらの哲学すべてにとっては、自己意識が自分自身と純粋に結びつくことが原理である」。したがって、「このような哲学の原理は客観的ではなく、独断的であり、自己満足をえようとする自己意識の衝動にもとづいている。……主観は自己のうちに、自己のために、自己の自由の原理を、したがって心の平静の原理を求める」(Hegel, Werke, 19, S. 250f, 宮本・太田訳, 156-158ページ)のである。

ヘーゲルによるこの特徴づけが1～3で検討したエピクロスの哲学に妥当することは明らかである。エピクロスを含む三派の哲学は、ギリシャで生まれながら、ローマ人が支配する世界の哲学となった。ヘーゲルによれば、ローマ世界が「理性的で実践的な自己意識にそぐわない世界」であったので、これらの哲学はローマ世界に背を向け、自己のうちに合理性を求めざるをえなかった。¹⁴⁾

では、ヘーゲル哲学における自己意識(Selbstbewußtsein, self-consciousness)とは何か。自己意識とは自覚あるいは自分自身についての意識のことであるが、ドイツ観念論では、主体としての

精神が自己を自覚すること、あるいは宇宙的な自我という形而上学的な意味をもつ（『岩波哲学小辞典』「自覚」栗田賢三・古在由重編、1979年より）。

ヘーゲル『精神現象学』によれば、精神がより低次な段階から高次な段階へと歩む過程において、感覚や知覚、悟性という段階では、対象の側に真理があり自分の側には確信だけしかない。そのため、意識は自分が真理だという確信に至ることができない。この意識にたいし、つぎの自己意識はたんなる自我ではなく、自分と対象との区別を保持しながら、自分自身を対象としながら同時に対象である他者を自分自身であると自覚する。またこのことによって自分と対象との区別を止揚する、そうした運動の過程にある意識である。

したがって、ヘーゲルの自己意識は実践的性格をもっている。まず、生命対象をとりこみ、食い尽くす欲求という意識形態をとる。つぎに、対象が他のもう1つの自立的な自己意識となり、相互の対等な関係において互いを自由で独立しているものと認め合う相互承認関係になる。

ヘーゲルはこれを「考える、自由な自己意識であるような意識」と言い、哲学史上のストア主義と懐疑論（scepticism）のなかに見いだした。ストア主義では思考する意識は世界（他在）にたいして無関心で、つねに自分に還り、善と徳に生きる。懐疑論は確実な真理の認識を否定することで誤謬を避け、自分自身を平静に保つ。これら2つにたいして、絶対的な不変を求めながら自分はそこに到達できない矛盾をかかえた意識が「不幸な、自分のなかで分裂した意識」である。（以上、『精神現象学』「B自己意識 IV自分自身の確信の真理 B自己意識の自由」）

以上のような自己意識は「自己の独立と自由だけを問題にしている」。しかし、この自己意識がつぎの理性になると、「意識の他在にたいする否定的な関係が肯定的な関係に転回する」（『精神現象学』「C理性」章冒頭）と言うのがヘーゲルである。この「理性的自己意識」はすべての現実性を自己意識にはかならないと確信している意識であるから、思考がそのままみずから現実性となる。「理性とは、理性が全実在であるという意識の確信である」。ここに「人倫の国」が開ける。そして人倫の実体は民族の「おきて」と「習俗」にある。

「人倫の国」における意識は普遍的自己意識といわれる。普遍的自己意識とは、2つの自己が各々自由な個性として絶対的な自立性をもちながら、他の自己のなかで自分を肯定的に知ることである。自由な自己意識である両者は、承認のための闘争の成果として、互いに承認されていることを知っている。普遍的自己意識はあらゆる人倫性（家族や国家、そして愛）の実体をなす。そこでは主観性と客観性とが同一であるから、自己意識は概念と実在性とが一致する理性になるというのである。（以上、『精神現象学』「V理性の確信と真理 B理性的自己意識の自分自身による実現」および『エンチクロペディー第3部 精神哲学』436～437節を参照）

ヘーゲルの自己意識とは結局、精神である。すなわち、精神は悟性（知性）から理性へと高まり、それらを契機としながら精神（精神、宗教、絶対知）に至る。ヘーゲルによる自己意識論の展開からみれば、エピクロスのアトモスは固定された本質、抽象的で個別的な自己意識にとどまっている。さらに、ヘーゲルの後、青年ヘーゲル派の中心人物として学位論文執筆時期のマルクスに影響を与えたとされるブルーノ・バウアー（Bruno Bauer, 1809-1882）の「自己意識の哲学」は、このヘーゲルの自己意識論の一面をとりだし、拡大した。ここではバウアーの哲学それ自体は検討の対象ではない。しかし、学位論文執筆時期（準備ノートを含め1839～41年）に書かれたバウアーの著作をもとに、バウアーの自己意識の哲学の特徴をみておこう。

青年ヘーゲル派が批判の対象としたのは、当時のプロシア国家とキリスト教教会との結びつきによる自由な精神への圧迫であった。1841年『ハレ年誌』に発表された「キリスト教国家と現代」のなかに、バウアーの哲学と思想をよく表すと思われるつぎの一節がある。

「革命（フランスの一引用注）、啓蒙主義および哲学は……国家を人倫的自己意識の包括的現象となるように改革した。この急激な改革は……これまで自分自身の権利にしばりつけられていた原子が解放されることにほかならない。これらの原子はそのときから平等な権利を獲得することができるのだが、それもまた……それぞれの原子が自分自身を抑えることによって他の原子と一体になることによってである。自己放棄が第1の律であり、自由はその必然的な帰結である。／……君主は国家の第1の下僕となる。」（良知編1974、壽福訳241ページ）

この一節に示されるように、バウアーは宗教や国家を自己意識の所産としてとらえた。そして、「国家が自由の顕現であり、普遍的自己意識の行為であることを示す」ためには、宗教の教義と教会は国家の一契機となるか、あるいはむしろ必要がないと主張する。「既成のものすべてを自分のうちに取り戻してしまうまで静止することはない」（同245ページ）バウアーの自己意識は、「精神の真の客観性」あるいは「無限性」を国家においてみいだすのである。

バウアーは同じ1841年、匿名で『無神論者で反キリスト者であるヘーゲルを裁く最後の審判ラッパ』を出版した。ほぼ全編にわたりヘーゲルの著作からの引用を根拠にヘーゲルと青年ヘーゲル派を攻撃するという形をとりながら、この著作は、実はヘーゲル哲学が神に変えて自己意識という名のもとに人間あるいは自我を最高の地位におく哲学であることを論証するものであった。バウアーは、「哲学は宗教を理解できるが、宗教は表象の立場にたっているので哲学を理解できない」として、宗教を自己意識の哲学に解消するだけでなく、普遍的にして無限の「自己意識こそが世界とその歴史の唯一の力である。歴史は自己意識の生成、展開という以外の意味をもたない」（良知・廣松編1987、大庭訳82ページ）とする。「自由と平等万歳」と言って革命を推奨し、「当為は実践と行為にならねばならない」と主張したのはヘーゲルだとバウアーは言う¹⁵⁾。

バウアーはこれらの著作をとおして自分こそがヘーゲル哲学の正統な継承者である自負を表明した。バウアーが主張するような面がヘーゲル哲学の一面にあることはたしかである。それはしかし、あくまでヘーゲル哲学の一面である。ヘーゲルでは、自己意識も、理性から精神に至り、さらに「みずからを概念と知る絶対知」（『精神現象学』）あるいは「絶対精神」（『エンチクロペデー』）になる。世界を創造するのはこの絶対精神である。バウアーの哲学はヘーゲル哲学のこうした転倒性を批判するのではなく、ヘーゲル哲学の一面である自己意識をもって人間とその自由を歌いあげた。しかも、ヘーゲルの国家論については無批判であった。（バウアーは1848年3月革命に背を向け、晩年は保守化し、反ユダヤ主義、反社会主義の立場に立ち、ビスマルクの国民自由党員になる¹⁶⁾）。

マルクスが学位論文にとりかかった際、その主題の設定にはバウアーやケッペン（C. F. Köppen, 1808-1863）らの示唆があったとされる（メーリング1918、栗原訳39ページ）。また、マルクスが学位論文の序言において「自己意識が最高の神性」であると宣言していることから、学位論文の「自己意識」とバウアーの「自己意識の哲学」のそれとを同一視する見解がある。たとえば、ローゼン（1977）の第2部第3章「マルクスの学位論文におけるバウアーの影響」は、エピクロスを含む三学派の哲学をとりあげる課題意識と自己意識の絶対性の主張においてマルクスとバウ

アーは共通であると強調している。したがって、学位論文執筆後（『聖家族』1845年）にマルクスがバウアーを厳しく批判したことについて、ローゼンは、「マルクスはバウアーの忠実な弟子であったという事実を忘れたのだ」（Rosen, p. 153）とする。しかし、ローゼンは学位論文においてマルクスが明らかにした自己意識の内容を検討しておらず、外面的な比較に終始している。

また、マクレラン（1969）は、「要するにマルクスの学位論文には、バウアーの考えのいくつかに強く共鳴する1人の普通の青年ヘーゲル学徒以外のものであったことを示すものは何ひとつない」（p. 73, 訳113ページ）¹⁷⁾と切り切る。

マルクスとバウアーはヘーゲルから学んだ「自己意識」という哲学用語で人間の自由と独立性、主体性を擁護することにおいて、たしかに同じ立場に立っている。しかし、両者の違いもまた明確である。それはマルクスがエピクロスのアトムの原子論を解釈するなかで把握した矛盾にある。マルクスはエピクロスの「抽象的個別的自己意識」が質料に媒介されて実在する有限なものであるととらえたので、バウアーの自己意識のような無限でも普遍的でもないとする。感性的自然における「経験的で個別的な自己意識」は「普遍的なもの」と矛盾することをマルクスは明らかにしたのである。これについて、山本（1985）は、バウアーの普遍的自己意識は結局、意識のうえにのみ成り立つものであるが、これにたいしてマルクスがとらえた「抽象的個別的自己意識」は現実世界に実存するものであると、両者の差異を指摘したうえでつぎのように述べる。

『学位論文』では、自己意識は意識でしかない自己の限界を措定し、質料に媒介されてはじめて自然界にアトムとして実存するものとなっていた。その結果、自己意識の自由、その絶対性は思惟の領域に局限されず、逆に現実の世界に拡大されていくのである。たしかに自己意識の自由、その絶対性は現実の世界では矛盾として、闘争として実存するのであるが、かかる意味において自己意識の自由を絶対化しているのはほかでもない、マルクスである。」（山本、37ページ）¹⁸⁾

他方、学位論文時点のマルクスをバウアーらと同じ立場とみなす見解とは正反対の考えを提起したのはルカーチ（1954）である。ルカーチは学位論文第1部第4章にある長い注に注目した。この注において、マルクスは、哲学体系と現実世界とは反省関係にあるので、哲学の実現は同時に哲学の喪失であると言う。それは哲学の担い手である自己意識に、世界に向かう要求と哲学それ自体に向かう要求という「両刃の要求」を生じさせる。どちらも体系を超えられず、体系の個々の契機を実現するにすぎない。哲学的自己意識の二重性は2つの対立方向となって現れる。1つの方向は哲学の概念と原理を保持しながら現実世界の欠陥を批判する活動へ、もう1つの方向は実在世界を保持しながら哲学の内部の欠陥へと向かう。マルクスは第1の方向を一般的に「自由派（die liberale Partei）」と特徴づけ、自由派は「内的な矛盾をかかえながら、一般的原理と自分の目的を意識している」ので、「内容においては、自由派のみが、概念の派（Partei）であるから、現実の進歩に導くのだ」（MEW, Bd. 40, S. 328-330）と評価するのである。

ルカーチはマルクスの一節を引きながら、ここにはすでに「哲学の政治的・革命的役割、ならびに哲学の実現による哲学の自己止揚という考えを準備するような思想がすでにはっきりとあらわれている」とみる。ルカーチによれば、マルクスはヘーゲルの評価においても青年ヘーゲル主義者をこえていた。青年ヘーゲル主義者は、ヘーゲル哲学の現実への順応性をその本質的な原理の不十分さにおいてとらえることができず、「ヘーゲル哲学の基礎そのものにたいしてはまるで

無批判的な態度をとっていた」ので、マルクスは「宗教批判にとどまっているブルーノ・バウアーらの青年ヘーゲル主義者をこえていた」とするのである。

ルカーチはエピクロス評価においてマルクスの学位論文がヘーゲル『哲学史講義』と異なっていただけでなく、「エピクロス原子論のうちに弁証法の萌芽をみいだした」ことを高く評価する。その弁証法の内容とは「人類に自由への道をひらく偶然性についての考え方」であり、自然学における自然の理性的認識である。この点は、確かに、ヘーゲルの自己意識の哲学を絶対化したブルーノ・バウアーにはないものであった。しかし、ルカーチはエピクロスの原子にある矛盾（「抽象的個別的自己意識」と「普遍的なもの」との矛盾）をマルクスが明らかにしたことに言及していない。また、エピクロスがぶつからざるをえない「具体的で普遍的なもの」とはいったい何なのかをまだ明らかにしていないというマルクスの限界についても、ルカーチは指摘していない。

学位論文は「自己意識の絶対性と自由」を主張し、プロシア国家とキリスト教の専制や圧迫、ヘーゲル哲学の現実妥協的性格を批判する「自由派」を評価しながら、まだ現実の国家と宗教そして歴史について何も分析していないことにその限界がある。これにはもちろん、ギリシャ哲学史を主題とする学位論文という目的による制約もあるだろう。

しかし、ヘーゲルも認めていたように、哲学史上、「自己意識の哲学」は大きな哲学体系（古代ではアリストテレス、近代ではヘーゲル）のあとでかならず出てくる。それは「積極的で進歩的な働きをもつ」（ルカーチ）。そして、「学位論文の精神を特色づけているのは、マルクスが、当時の傾向のなかで、進歩的な政治的党派であるリベラリズム（Liberalismus）だけが内容のあるもので、哲学が同盟を結ぶべきだと考えていたことにある」（ルカーチ、平井訳21-22ページ）。

ルカーチはこの「リベラリズム」に注釈を付し、「当時のドイツではラディカル民主主義はまだ自由主義と分離していなかった」（同）と述べている。学位論文当時のマルクスの思想については急進的民主主義という評価が旧ソ連などでなされていた（たとえばオイゼルマン1962）が、ルカーチの自由主義という評価の方が妥当である。学位論文の「自己意識」にあらわされた若いマルクスの思想は自由主義あるいは個人主義から出発したとみるべきである。それはマルクス自身がヘーゲル以後の哲学の動向において「自由派」と名づけたこともあるが、マルクスが民主主義について自覚的にとりあげるのは、1842年に『ライン新聞』の主筆となって国家（法）その他の問題に正面から取り組まざるをえなくなり、翌1843年夏に「ヘーゲル国法論批判」ノートを書くに至ってからである。学位論文における個人の自由は現実世界における「普遍的なもの」¹⁹⁾によって制限されるという矛盾に直面する。この「普遍的なもの」が何であり、どのようにしてこの制限が克服されるのか、それをなしとげる実践主体を明らかにする課題が学位論文期のマルクスにはなお残されたのである。

5. 観念論と唯物論—むすびにかえて

以上、検討してきたことをまとめると、マルクスの学位論文は古代ギリシャ哲学のなかでエピクロスの原子論のなかに人間の自己意識をみいだし、抽象的、論理的にはあっても、人間の主体的自由とその制限による矛盾を導出した。その限りで、ヘーゲルの弁証法的方法を駆使するこ

とでヘーゲルのエピクロス評価とは反対の見解に到達したのであり、ヘーゲルの弟子であったブルーノ・バウアーのような自己意識と自由の絶対性だけを主張することはなかった。哲学史を主題とすることの限界と、マルクス自身の理論的未熟さがあるとはいえ、そこにはたしかにその後のマルクスの急速な理論的成長の芽がある。

そこで最後に、学位論文執筆当時のマルクスの哲学的立場について検討しておきたい。

マルクスの学位論文を最初に公にしたメーリング（1918）は、「マルクスがヘーゲル哲学の思弁的言いまわしを使ってエピクロス哲学を解説したのは、ヘーゲルの弟子である自分自身にさづけたヘーゲル哲学の卒業資格証明書なのだ。とはいえ、マルクスはまだこの著述でもまだまったくヘーゲル哲学の観念論的立場にたっている」（『マルクス伝』栗原訳47ページ）と書いた。

これにたいして、ルカーチはもう一步踏み込んで、つぎのように評価する。「1840年から41年ごろのマルクスはまだかって唯物論者ではなかった」。すなわち、マルクスの「当時の世界観は急進的な無神論的汎神論であり、したがっておのずから客観的観念論の傾向をともなっていた。しかしマルクスには、他の急進的青年ヘーゲル主義者がかれらのお師匠（ヘーゲルのこと—引用注）から受けついで、唯物論にたいする偏見などというものはみじんも見いだされなかった。／この意味で、古代最大の唯物論者たるデモクリトスとエピクロスの遺産に目を向けたということは、そのことだけでもたいしたことだといわねばならない」（ルカーチ、平井訳14ページ）。

マルクスが学位論文直後にフォイエルバッハの唯物論を受容した事実を考えれば、このルカーチの評価は妥当である。ただ問題はヘーゲル的観念論あるいは客観的観念論の内容にある。

観念論（Idealismus）については、ドイツ観念論が理想主義的傾向をもつのにたいして、「ヘーゲルは理性や理念を現実のうちに内在するとみなすので、ヘーゲルの立場は理念主義というべき」（岩佐・島崎・高田編1991、54ページ）だとされる。この点で、マルクスは、学位論文にとりかかる前に書いた「父への手紙」（1837年11月、ベルリン）で、自分の勉学の経過をあれこれと（弁解のために）書き送った。手紙では、「理想主義的な詩」の作成から法哲学の勉学に移った際、「現実と当為との、理想主義（Idealismus 観念論？）に特有な対立が妨げとなった」と書いている。それは現実の法と主観的諸規定との対立のことを意味するのだが、客観的世界では「事物それ自体の理性がそれ自体のなかで衝突するものとして回転し続け、それ自身のなかで自分の統一を見いだすのでなければならない」とする。手紙の文面はその後、法の哲学的展開の図式を描きながらこれを反省し、「ちなみに、私は、カントおよびフィヒテの観念論と比較し、いだいてきた観念論から、現実的なものそのもののうちに理念を求めるところまでゆきついた」と述べる。この後、ヘーゲルを「始めから終わりまで知るようになって」、ベルリンのドクター・クラブに入り、そこで「大きな役割を演じているバウアー（ブルーノ）」とも協力関係にあると書き記している（以上、MEW, Bd. 40, S. 4-10）。

この手紙に記されているように、マルクスはベルリン時代にヘーゲル哲学を受け入れたようである。それはカントおよびフィヒテの哲学からの移行であった。では、「現実的なものそのもののうちに理念を求めると」のはヘーゲル的な客観的観念論であろうか。

ヘーゲルのいう観念論では、先に注4)でもみたように、「有限なものは真に存在するものではない」ので、存在するものは理念あるいは精神という無限なものの契機になる。端的に言って、「真の哲学はすべて観念論である」（ヘーゲル）。これにたいして、マルクスはすでに観念論あるい

は理想主義には「あるべきもの(当為)とあるもの(現実)とのあいだの矛盾」が避けられないことを自覚し、事物自体のなかに理念を求めるという方法に立つことを明言していた。たしかにこれもヘーゲル哲学の一面ではあるが、理念あるいは観念が現実世界を創造するという、ヘーゲル哲学がもつもう1つの考え方はすでにみられない。

先に見たように、学位論文におけるエピクロスのアトモイシズムに自己意識の哲学をみてとったマルクスは、原子の質料性と形態規定性とのあいだの矛盾をみいだした。「原子は自立性、個別性の形態における質料である」(Ibid., S. 302)。ところがエピクロスは天界・気象界における天体に「自然の实在性と自立的な不滅性」をみいだし、個別的自己意識は「現存在と自然となった普遍的なもの」(自己意識とは言っていない)あるいは「自立的となった自然の現実性」を否定し、これに立ち向かう。したがって、自己意識の観念性は質料性の制約を免れない、有限なものとしてマルクスはとらえている。これはやはりヘーゲルの観念論を超えるものではないだろうか。

学位論文のなかでマルクスは、デモクリトスやエピクロスの哲学を唯物論とは言っていない。しかし、自己意識のなかに質料(Materie)をみいだし、質料による制限性を明確にしたことは、その後に唯物論(Materialismus)を受容する要素になったと考えられる。そして、哲学的自己意識が「世界を非哲学性から解放することは、同時に、一定の体系としてこれらを桎梏につないでいた哲学から自己を解放するということである」(Ibid., S. 329)という学位論文第1部への注こそは、学位論文以後のマルクスの理論的方向性をさし示している。またここには、意識とイデオロギーにたいするマルクスの理論を明らかにする手がかりがある²¹⁾。これらは、学位論文以後のフォイエルバッハ唯物論の本格的な検討、青年ヘーゲル派ベルリン・グループ「自由人」との決別、『ライン新聞』における一連の取り組みを経て、ヘーゲル国法論の批判などにおいて明確になっていくと考えられる。

注

- 1) エピクロスの著作については、出隆・岩崎允胤訳『エピクロス—教説と手紙—』(岩波文庫版、1959年)を参照し、「岩文」として邦訳ページ数を付す。同訳書には詳細な注とすぐれた解説がある。マルクスの「学位論文」をめぐる従来の議論では、同書の注および解説がじゅうぶんに生かされていない。
- 2) 『ヘーゲル全集13 哲学史 中巻の2』宮本十蔵・太田直道訳、岩波書店、2001年、216ページを参照。
- 3) 「エピクロスの感覚論は、はっきりと唯物論、反映論の上に立っている」(出・岩崎訳注、岩文162ページ)。
- 4) ヘーゲルによれば、「有限な存在そのものに真の、究極の、絶対的な存在を認めようとするような哲学は哲学の名に値しない。古代や近世の哲学の原理、例えば水(タレス—引用者注)、物質、原子(デモクリトス、エピクロス—引用者注)といったものもじつは思考であり、普遍的なもの、観念的なものであって、直接に見いだされるような、感覚的個別性における物ではない。」「有限者を真なる存在と認めないところに哲学上の観念論が成り立つ」(『ヘーゲル全集6a 大論理学 上巻の1』武市健人訳、186-187ページ)。ヘーゲル論理学では、一者としての原子と空虚も「向自有」の論理のなかに位置づけられ、吟味される(同上201ページ以下の注釈を参照)。『エンチュクロペディー』「第1部 小論理学」(第3版、1830年)第98節でも同じような論旨で原子論が扱われている。
- 5) この引用文中のカッコ内にある「方向の偏り」という概念は残存テキストでは脱落しており、他の

伝承によって証拠だてられているものである（出・岩崎訳160ページの訳注を参照）。

- 6) ヘーゲルの主要著作の1つである『精神現象学』（1807年）では、「自己意識」章のなかの「B 自己意識の自由」で「ストア派と懐疑論と不幸な意識」が扱われるが、エピクロスの哲学はとりあげられない。この意味では、マルクスの学位論文はエピクロスの哲学を「自己意識の哲学」として復権させ、ヘーゲルの評価とは異なる光をあてたといえる。
- 7) 学位論文は1841年にイェナ大学哲学部に提出され、学位が授与された。マルクス自筆の手稿はなくなっており、未知の筆写者により印刷のためにつくられたらしい、不完全な写しが保存されている。これにはマルクスの手による訂正や挿入、補足が付されている。（以上、MEW, Bd. 40, 注解より）神田（2009）は、アムステルダム国際社会史研究所所蔵の草稿が学位論文の原本である可能性が高いとする。
- 8) 学位論文の本文はほぼ、エピクロス哲学の主要な原則が述べられた「ヘロドトス宛の手紙」に沿って書かれている。また、7冊の準備ノートには「エピクロスの哲学」の表題をもつ5冊と、ヘーゲル『エンチュクロペディー』（第3版）からの抜粋「自然哲学の概要」一邦訳『全集』大月書店版補巻1所収—を含む2冊がある。
- 9) エピクロス哲学における原子の運動とくに反発と人間の本質の解釈において、マルクスは明らかにヘーゲルの弁証法に依拠している。

ヘーゲルにおいては人間の意識は向自有（Fürsichsein、自分に向ってあること、対自有とも訳される）の例であり、自己意識は向自有の完成されたものであった。向自有とは「他者との関係を自分の契機としてもちながら自分に還っている或るもの」で、ヘーゲル論理学・有論の弁証法の第3の核心である。向自有は「1つのもの」で独立した個であるから、1つひとつ数えられる。ヘーゲルは「1つのもの」と他の多くの「1つのもの」との関係を「反発」と「牽引」ととらえている。（以上、角田2005、48ページ参照）

第4ノートにこのことを示すマルクスの記述がある。

「直線的な道からの原子の偏りという考えは、エピクロス哲学のもっとも内的な経過にもとづく、もっとも深い帰結の1つである。（中略）直線、単一な方向は、直接的な向自有である点の止揚である。……原子の本性は向自有である。」（MEW, Bd. 40, S. 165）。

なお、ヘーゲル『精神現象学』「自己意識」の章におけるつぎの叙述も参照されたい。

「自己意識は、自分にたいし自立した生命として現れる他者を止揚することによってのみ、自分自身を確信する。だから、自己意識は欲求である。」（PhG., S. 143, 榎山訳215ページ）

- 10) 出隆と岩崎允胤はつぎのような注釈（岩文、161ページ）を付している。ヘーゲルがその意味を見落とした原子の方向の偏りの概念にマルクスは注目し、その弁証法的意義を評価した。この概念は「2つの点で重要である」。1つは、デモクリトスの機械的必然観にたいし、必然性と偶然性とを統一したこと、もう1つは、デモクリト斯的決定論に反対して、自由意志を、理性をつくるひじょうに微細な原子の方向の偏りにもとづくと考え、原子論的にこれを解決しようとした点である。これは至当な見解だと思われる。
- 11) エピクロスの欲求、友愛および正義についての考えは『エピクロス』「主要教説」26～40（岩文、82～86ページ）を参照。マルクスは第1ノートにこれらを書き抜いている。とくに正義論に関する叙述について、「以下の章句は精神的本性、国家についてのエピクロスの見解をなす。かれにとっては契約がその基礎であり、したがってまた、有用なこと、つまり効用の原理のみがその目的である」（MEW, Bd. 40, S. 28f）というコメントを記した。
- このコメントはヘーゲルのつぎの叙述に対応する。「近代においては、原子論哲学は、政治学においていっそう重要になっている。それによれば個人の意志が国家の原理である。すなわち、牽引するものは欲求、傾向のような特殊性であり、普遍的なもの、国家それ自体は契約の外的な関係である」（『エンチュクロペディー』第98節, Werke Bd. 8, S. 207, 松村訳, 297～98ページ）。
- 12) 「ギリシャのポリス制の崩壊期に生きたエピクロスは、現実の社会との関係を断ち切り、個人的な

自己充足の徳を説いた。かれの立場は個人主義であり、原子論はその自然学的基礎であった。」（出・岩崎，岩文174ページ）。

なお、ルクレティウス『物の本質について』（岩波文庫版12ページ）をも参照。

- 13) 学位論文の記述のなかに、エピクロスの「天体においては、質料は……具体的な個別性、普遍性になっている。したがって、メテオレにおいては、抽象的に個別的な自己意識と相対して輝いているのは……現存在と自然とになった普遍的なものである」（MEW40, S. 303）という記述がある。「普遍的なもの」「普遍性」（Ibid., S. 304）がエピクロスの「抽象的で個別的な自己意識」とストア派の「抽象的で普遍的な自己意識」と対置されている。これをもって、廣松（1971）は、マルクスの立場はバウアーよりもヘーゲルの「具体的普遍」に近く、啓蒙主義からは遠いと城塚（1970）を批判する。黒沢（1979, 1994）もこの「具体的普遍」の立場に賛意を示す。しかし、ここで重要なのは、マルクスがここにエピクロス「最大の矛盾」（Ibid., S. 303）すなわち自身が立脚しようとする「具体的で個別的な人間」と「具体的で普遍的なもの」とのあいだの矛盾を見いだしたことである。また、廣松（1968）は、マルクスがエピクロスを自己否定してとりだした「具体的普遍としての自己意識」がバウアー流に理解したヘーゲル哲学の主体＝実体たる精神であることは多言を要しない（1974, 208～209ページ）とする。しかし、マルクスは「具体的普遍としての自己意識」とは書いていない。本文で紹介するように、ヘーゲルの普遍的自己意識では概念と実在性の矛盾が解消されるので、廣松の解釈によればマルクスとバウアー、ヘーゲルとが同一視され、マルクスがエピクロス原子論に見いだした矛盾を否定することにつながる。
- 14) 岩淵（1986）は、アリストテレス以後のエピクロスを含む哲学が自己意識の哲学であり、エピクロス哲学が啓蒙主義の性格をもっていたことは青年ヘーゲル派を含むヘーゲル学派全体的見解であったが、ヘーゲルも認めたこれら哲学の近代哲学との連続性をさらにラディカルに展開しようとしたのがマルクスだとする。（同、22～29ページ）
- 15) バウアーの思想については良知力（1968）を参照。また村上（1977）はバウアーの自己意識の哲学を本格的に検討している。バウアーは真の自由主義を確立し、普遍的自己意識の実践を唱えた思想家であるが、あくまで哲学的意識の枠内にとどまったというのが村上の評価である。さらに、渡辺（1989）第4章はマルクスによるバウアーの自己意識の哲学の「止揚」をていねいにとりあげている。1838年以降のバウアーの立場は師ともいえるヘーゲルがその限界を批判した啓蒙に近い。ヘーゲルは、『精神現象学』において、啓蒙は無神論に向かい、感性のみを実在とみるか、あるいは感性をつうじてとらえられる物質を世界の原理とする唯物論に進む、そして社会観においては個人主義と無政府主義になると批判した。
- 16) 後のブルーノ・バウアーに関する研究として、石塚編（1992）所収のつぎのものがある。「ブルーノ・バウアーにおけるヘーゲル左派の総括」（林真佐事）、「ブルーノ・バウアーと三月革命」（村上俊介）、「ブルーノ・バウアーの反ユダヤ主義」（篠原敏昭）。
- 17) マルクスの学位取得にいたるベルリンでの生活実態と理論形成の過程を検討した神田（2009）も、学位論文はバウアーの「自己意識の哲学」の圧倒的影響のもとで書かれたとする。
- 18) ここには方法の問題がかかわる。「所与の具体的な対象のうちに、まず普遍、あるいは本質を抽出し、次に特殊による普遍の否定、実存による本質の否定を抽出し、そこに普遍と特殊との矛盾、本質と実存との矛盾を分析するというこの方法は……マルクスの全著作を貫く赤い糸である。」（山本39-40ページ）

正木（1972, 1973）は学位論文と準備ノートを丹念に検討し、「マルクス思想形成の出発点」において、実践主体としての自己意識の被拘束性によって生じる矛盾の認識が、自己意識を普遍的主体に高めるバウアー流の傾向を克服する「思想的転回」になるとしている。

山中（1972, 初出1968）も、エピクロスは「人間の主体的自由の道を明らかにした哲学者」であり、原子の反発運動は「アトムの近代人の構造的矛盾の自然的表現として把握される」と理解する（同、27ページ）。

19) さしあたり角田（2008）を参照。

コルニュも、学位論文当時のマルクスはもはや自由主義ではなく民主主義の立場にたっていたとする（Cornu1954, S. 204, 1948青木訳89ページも同様）が、この評価は先走りすぎである。なお、コルニュの大著については重田（1958）に紹介がある。

関連して、城塚（1970）は、マルクスの哲学的出発点には3つの契機があるとして、ヘーゲル哲学、自己意識の立場に続く第3の契機として「自由主義、人間主義、感性的現実主義、実証主義というフランス啓蒙主義」があるとする（同書第2章）。自由主義と人間主義は了解できるが、ヘーゲルの啓蒙批判（注15参照）を知るマルクスは当時すでに啓蒙主義の限界をいかに超えるかを模索していたのではないだろうか。

20) フランスのヘーゲル研究者ジャン・イッポリットはこの若いマルクスの手紙の一節に注目している（イッポリット1955, 訳178ページ）。

21) 角田（2013）（2014a）（2014b）。

References：原書発行順。著者，邦訳名，原書，邦訳書の順で表示

- エピクロス『エピクロス』出隆・岩崎允胤訳，岩波文庫，1959年。
- ルクレーティウス『物の本質について』樋口勝彦訳，岩波文庫，1961年。
- ヘーゲル（Hegel, G. W. F.）『精神現象学』Phänomenologie des Geistes, Werke, 3, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1970. 壺山欽四郎訳，上・下，平凡社ライブラリー，1997年。
- ヘーゲル『大論理学』Wissenschaft der Logik, Werke, 5, 6, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1969. 武市健人訳，上・中・下，岩波書店，ヘーゲル全集6～8，1956～61年。
- ヘーゲル『エンチクロペディ』Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830), Erster Teil, Dritter Teil, Werke, 8, 10, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1970. 松村一人訳『小論理学 上巻，下巻』岩波文庫版，1951～52年，船山信一訳『精神哲学（上）（下）』岩波文庫版，1965年。
- ヘーゲル『哲学史』Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie, I, II, Werke, 18, 19, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1971. 『哲学史 上巻』武市健人改訳，岩波書店，ヘーゲル全集11，1974年，『哲学史 中巻の2』宮本十蔵・太田直道訳，岩波書店，ヘーゲル全集13，2001年。
- ブルーノ・バウアー（Bruno Bauer）『無神論者で反キリスト者のヘーゲルを裁く最後の審判ラッパ』Die Posaune des jungsten Gerichts über Hegel den Atheisten und Antichristen, Neudruck der Ausgabe, Leipzig 1841, Scientia Verlag Aalen, Darmstadt, 1969. Hegelische Linke, ausgewählt und eingeleitet von Karl Löwith, Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1962, S. 123-225. 大庭健訳，良知力・廣松渉編『ヘーゲル左派論叢第4巻』御茶の水書房，1987年，所収。
- ブルーノ・バウアー『キリスト教国家と現代』壽福眞美訳，良知力編『資料 ドイツ初期社会主義 義人同盟とヘーゲル左派』平凡社，1974年，所収。
- マルクス（Karl Marx）『デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異』Doktordissertation: Differenz der demokritischen und epikureischen Naturphilosophie nebst einem Anhang, und Hefte zur epikureischen, stoischen und skeptischen Philosophie, Marx Engels Werke, Ergänzungsband, Erster Teil, Dietz Verlag Berlin, 1968. 岩崎允胤訳，ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編『マルクス・エンゲルス全集』第40巻，大月書店，1975年。中山元訳『マルクス・コレクション I』，筑摩書房，2005年。
- メーリング『マルクス・エンゲルス・ラッサール遺稿集』第1巻，1902年にはじめて公表。
- Mehring, F. Aus dem literalischen Nachlass von Karl Marx, F. Engels und F. Lassale, Stuttgart, 1902. (未見，山中隆次1972, 12ページ注による)
- リャザノフ編『マルクス・エンゲルス全集』第1部第1巻第1分冊，1927年，注解，7冊の準備ノートとともに刊行。Marx/Engels Gesamtausgabe, I-1/1, Herausgegeben von D. Rjazanov,

- Moskau, 1927. SS. 1-144, 服部英太郎訳『改造社版 マルクス = エンゲルス全集』第1巻, 1928年, 所収（注解および7冊の準備ノートの訳は含まれていない）。
- Marx Engels Gesamt Ausgabe (MEGA), Erste Abteilung, Bd. 1, Karl Marx Werke Artikel Literarische Versuche Bis März 1843, Dietz Verlag Berlin, 1975, SS. 5-92. Vierte Abteilung, Bd. 1, Karl Marx Friedrich Engels Exzerpte und Notizen Bis 1842, Dietz Verlag Berlin, 1976, SS. 5-152. (MEW 版とは第5ノートと第6ノートが逆で, 他にも少し違いがある)
- レーニン『カール・マルクス』村田陽一訳, 大月書店 (大月センチュリーズ), 1983年, 『レーニン全集』(第4版) 第21巻, 大月書店, 1957年。
- メーリング (Franz Mehring) 『カール・マルクス—その生涯の歴史—』Karl Marx: Geschichte seines Lebens, Leipzig, 1918, Franz Mehring Gesammelte Schriften, Band 3, Dietz Verlag Berlin, 1960. 栗原佑訳, 第1巻, 大月書店, 1953年。
- Karl Marx, The Story of His Life, translated by Edward Fitzgerald, 1936, London, Reprinted 1981, Humanities Press, USA.
- フック (Sidney Hook) 『ヘーゲルからマルクスへ』From Hegel to Marx, Studies in the Intellectual Development of Karl Marx, 1936, With a New Introduction by Sidney Hook, The University of Michigan, 1962. 小野八十吉訳, 御茶の水書房, 1983年。
- レーヴィット (Karl Löwith) 『ヘーゲルからニーチェへ』Von Hegel zu Nietzsche, Zürich, 1941. 柴田治三郎訳, 岩波書店, 1952~53年。
- コルニュ (Auguste Cornu) 『マルクスと近代思想』Karl Marx et la pensée moderne, Contribution à l'étude de la formation du marxisme, Paris, Editions sociales, 1948. 青木靖三訳, 法律文化社, 1953年。訳書は著者コルニュからの指示により原文を訂正, 拡充したもの。
- Auguste Cornu, Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werk, Erster Band 1818-1844, Aufbau-Verlag, Berlin, 1954.
- ルカーチ (George Lukacs) 『若きマルクス』Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx (1840-1844), Deutsche Zeitschrift für Philosophie, 1. 2 Jahrgang 1954, Deutscher Verlag der Wissenschaften, Berlin, S. 288-343. 平井俊彦訳, 改訂版, ミネルヴァ書房, 1958年。
- イッポリット (Jean Hyppolite) 『マルクスとヘーゲル』Etudes sur Marx et Hegel, Paris, Librairie Marcel Rivière et Cie, 1955. 宇津木正・田口英治訳, 法政大学出版局, 1970年。
- 淡野安太郎『初期のマルクス—唯物史観の成立過程—』勁草書房, 1956年。
- 重田晃一「初期マルクスと青年ヘーゲル派」関西大学『経済論集』第7巻第7号, 1958年1月。
- 山中隆次「マルクス『学位論文』(1841年)について—マルクス—ヘーゲル関係理解のために—」一橋大学経済研究所『経済研究』第9巻第2号, 1958年4月。
- Karl Löwith, Die Hegelsche Linke, ausgewählt und eingeleitet von Karl Löwith, Friedrich Fromman Verlag, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1962. 麻生建訳「ヘーゲル左派の哲学における哲学的理論と歴史的实践」麻生編『ヘーゲルとヘーゲル左派』所収, 未来社, 1975年。
- オイゼルマン, テ・イ『マルクス主義哲学の形成 第一部』森宏一訳, 勁草書房, 1964年。
- 富沢賢治「初期マルクスとキリスト教(1)(2)」『一橋論叢』第52巻第6号, 1964年12月, 第53巻第2号, 1965年2月。
- Günter Hillman, Marx und Hegel, Von der Spekulation zur Dialektik, Europäische Verlagsanstalt Frankfurt am Main, 1966.
- 廣松渉『マルクス主義の成立過程』至誠堂, 1968年, 新装版1974年, 増補版1984年。
- マクレラン (David McLellan) 『マルクス思想の形成』The Young Hegelian and Karl Marx, The Macmillan Press Ltd, 1969. 宮本十蔵訳, ミネルヴァ書房, 1971年。
- マクレラン『マルクス主義以前のマルクス』Marx before Marxism, Macmillan and Co Ltd, London, 1970, Second edition. 1980. 西牟田久雄訳 (初版), 勁草書房, 1972年。

- 城塚登『若きマルクスの思想』勁草書房，1970年。
- 良知力『初期マルクス試論』未来社，1971年。（ブルーノ・パウアー論の初出1968年5月）
- 廣松渉『青年マルクス論』平凡社，1971年。
- 山中隆次『初期マルクスの思想形成』新評論，1972年。（第1章の初出は1969年3月）
- 正木八郎「マルクスにおける実践概念の生成」『思想』（岩波書店）第580号，1972年10月。
- 正木八郎「マルクス思想形成の出発点」『現代の理論』第114号，1973年7月。
- 良知力編『資料ドイツ初期社会主義 義人同盟とヘーゲル左派』平凡社，1974年。
- 鈴木伸一「マルクスの哲学的出発点における知と実在の問題」『熊本大学法文論叢』第34号，1974年7月。
- 大井正『マルクスとヘーゲル学派』福村出版，1975年。
- 村上俊介「ブルーノ・パウアーにおける自己意識の哲学—三月革命前夜の自由主義的『ラッパ』—」専修大学大学院紀要『経済と法』第8号，1977年3月。
- 疋野景子「『研究ノート』マルクス『学位論文』における「自己意識」」『一橋論叢』第78巻第2号，1977年8月。
- Zvi Rosen, Bruno Bauer and Karl Marx, The Influence of Bruno Bauer on Marx's Thought, Martinus Nijhoff, The Hague, Netherlands, 1977.
- 村上俊介「『研究ノート』ブルーノ・パウアー批判としての『経済学・哲学草稿』」『専修経済学論集』第13巻第1号（24号），1978年8月。
- 黒沢維昭「マルクスの『学位論文』についての一考察—「具体的普遍」を中心にして—」神奈川大学人文学研究所『人文学研究所報』第13号，1979年6月。
- 疋野景子「宗教批判と哲学の実現—マルクス『学位論文』補遺を中心として—」岩崎允胤編『価値と人間的自由』汐文社，1979年11月，所収。
- 粟田賢三・古在由重編『岩波哲学小辞典』岩波書店，1979年。
- 鷲田小彌太『哲学の構想と現実 マルクスの場合』白水社，1983年。
- 山本広太郎『差異とマルクス』青木書店，1985年。（第1章の初出は1981年3月）
- 岩淵慶一『初期マルクスの批判哲学』時潮社，1986年。
- 良知力・廣松渉編『ヘーゲル左派論叢 第4巻 ヘーゲルを裁く最後の審判ラッパ』御茶の水書房，1987年。
- 良知力『ヘーゲル左派と初期マルクス』岩波書店，1987年。
- 渡辺憲正『近代批判とマルクス』青木書店，1989年。
- 岩佐茂・島崎隆・高田純編『ヘーゲル用語事典』未来社，1991年。
- 加藤尚武ほか編『ヘーゲル事典』弘文堂，1992年。
- 石塚正英編『ヘーゲル左派 思想・運動・歴史』法政大学出版局，1992年。
- 黒沢維昭「具体的・普遍的「自己意識」の展開—再考—マルクス「学位論文」と「ライン新聞」期の接合—」『理想』第653号，1994年6月。
- 工藤秀明『原・経済学批判と自然主義—経済学史と自然認識—』千葉大学経済研究叢書，1997年。
- フォスター（John Bellamy Foster）『マルクスのエコロジー』Marx's Ecology, Materialism and Nature, Monthly Review Press, 2000, N. Y. 渡辺景子訳，こぶし書房，2004年。
- 石井伸男『マルクスにおけるヘーゲル問題』御茶の水書房，2002年。
- 田畑稔『マルクスと哲学—方法としてのマルクス再読』新泉社，2004年。
- 角田修一『「資本」の方法とヘーゲル論理学』大月書店，2005年。
- 角田修一「近代市民社会批判の学としてのヘーゲルとマルクス」『立命館文学』第603号，2008年2月。
- 神田順司「マルクスと学位論文」同編『社会哲学のアクチュアリティ』未知谷，2009年，所収。
- 角田修一「経済過程における意識とイデオロギー」関西唯物論研究会編『唯物論と現代』第50号，文理閣，2013年10月。
- 角田修一「経済過程における意識とイデオロギー—ポスト・マルクス（その1）—」『立命館経済学』第

62巻第5・6号, 2014年3月。

角田修一「経済過程における意識とイデオロギー—ポスト・マルクス（その2）—」『立命館経済学』第63巻第1号, 2014年5月。

Abstract

On Marx's Dissertation — Its Philosophy and Thought

By KAKUTA Shuichi

In early April 1841 Karl Marx submitted his work to the Faculty of Philosophy of the University of Jena as a dissertation for a doctor's degree and received the degree on April 15. The thesis was the difference between the Democritean and Epicurean philosophy of nature. He did not succeed in getting it published. The first publication was in 1902 by F. Mehring. The full manuscript including Marx's notes was carried out by the Institute of Marxism-Leninism in 1927 in Volume One of MEGA. Marx's own manuscript of the thesis has been lost. What remains is an incomplete copy written by an unknown person, but this copy has corrections and insertions in Marx's handwriting.

Sometimes it was said that Marx's choice of a subject for his thesis was influenced by the Young Hegelian, especially Bruno Bauer. But the thesis is unique and interesting. Epicurus was a great materialist philosopher in Greece. He thought that the atoms in the void was the ultimate. Marx called Epicurus the greatest representative of Greek Enlightenment. The principles of Epicurus' atomism is the absoluteness and freedom of self-consciousness, even if self-consciousness is only conceived in the form of abstract-individuality. Marx evidently found human consciousness in Epicurus' atom. And he noticed too that the atom had most glaring contradiction between its essence and existence, between its form and matter. So the abstract-individual self-consciousness struggles against "the existing universal".

Using the dialectical methodology of G. W. Hegel, Marx thought that Hegel treated Epicurus with a certain degree of scorn, and Marx wrote in the forward of the dissertation that Hegel could not recognize the great importance of Epicurus' philosophy because of Hegel's view of what the giant thinker called speculative thought. Though Marx was not yet a materialist, he noticed the dualism of form and matter. But he did not clarify the concrete content of "the universal existence". After the dissertation, in 1842-43, as editor of the "Rheinische Zeitung", Marx first found himself in the embarrassing position of having to discuss what is known as material interests, as he wrote in the preface to A Contribution to the Critique of Political Economy, first published in 1859.